

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリスト オスカ みよ、なんぢはじゅうじかにてしを
 神 爾 十 字 架 死
 ほろぼし、とうぞくのためにくえんをひ
 滅 盗 賊 爲 樂 園 開
 らき、けいこうぢよのかなしみをなぐさ
 攜 香 女 悲 慰
 め、しとになんぢがふくか つして、せか
 使 徒 爾 復 活 界
 いにおおいなるあわれみをたまいしをつたえ
 大 憐 賜 傳
 させたまえり。
 給

【 生神女進堂祭のトロパリ 第4調 】

こんにちかみのめぐみはしめさあ、ひ
 今日 神 恩 恵 示 人
 とびとのすくいはずたえらる。どうてい
 人 救 傳 童 貞
 ぢよはあきらかにかみのでんにあらわれて、
 女 明 神 殿 現
 あらかじめハリストスをしゅうじんにしらしむ。
 預 衆 人 知

われらもこえをあげてかれによばん。ぞう
 我等聲揚彼呼 造
 ぶつしゅのおもんばかりとじょうじゅなるものよ、
 物主思慮成就者
 よろこべよ。
 慶

【日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調】

こうえいはちちとこ とせいしんにき
 光榮父子と聖神に歸
 す、

しとひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使徒等同座者 忠
 じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神智 役者 聖
 なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛
 にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光
 しよ お しゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 お 者、 亜使徒主教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのたあめ、および
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【 生神女進堂祭のコンダク 第4調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世

きゆうせいしゆのいとよおきでん、いたりて
 救 世 主 最 淨 殿 至

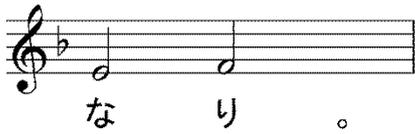
とおときみや、かみのこうえいのせいに
 貴 宮 神 光 榮 聖

せられしほうぞうたるどうていぢよおは
 宝 蔵 童 貞 女

こんにちしゆのいえにいれられて、せいしんのおんちよ
 今日 主 家 入 聖 神 恩

うをともにいらしむ。かみのつかいら等
 共 入 神 使 等

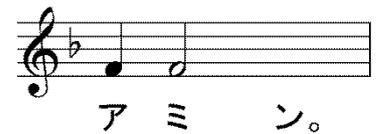
はかれをうたいていう、これてんのまく
 彼 歌 曰 此 天 幕



な り 。

司祭) (黙誦: ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしよう} 聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしよう} セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、^{ことごと てんぐん ふくはい} 悉くの天軍より伏拝せられ、^{ばんぶつ む ゆう} 萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 願う者に智慧と明悟とを與え、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 罪を行つる者を棄てずして、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} を立て、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 此の時に於ても、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ちて、^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} を聖にし、^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} 聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) ^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 蓋我が神よ、^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 爾は聖なり、^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 今も何時も世世
 に、



ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 を 憐 愍
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光 榮 父 子 聖 神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等 憐
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、



司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅ そのたみ ちから たま} 主は其民に力を賜い、^{しゅ そのたみ へいあん ふく くだ} 主は其民に平安の福を降さん、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は 主 其 民 力 賜 主
その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く だ 其 民 平 安 福 降
さ ん。

誦經) ^{かみ しょし} 神の諸子よ、^{しゅ けん} 主に獻ぜよ、^{こうえい せんき} 光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、^{しゅ けん}

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は 主 其 民 力 賜 主
その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く だ 其 民 平 安 福 降
さ ん。

誦經) ^{しゅ そのたみ ちから たま} 主は其民に力を賜い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く 主 其 民 平 安 福 降
だ さ ん。

【 使徒經 (アポストロス) 221 端 エフェス書2 章 14 節~22 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒^{じん たつ}パウエルがエフェス人^{しよ よみ}に達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{われら わへい} ハリストスは我等の和平なり、^{ふたつ もの ひとつ な} 二の者を一と爲し、^{へだて かき こぼ おのれ} 隔の墻を毀ち、己

^{み もつ あだ はい} の身を以て仇を廢し、^{おしえ もつ しょかい} 教を以て諸誠の律法^{りっぽう はい}を廢せり、^{こ わへい な} 是れ和平を爲して、^{ふたつ もの} 二の者

^{もつ おのれ おい} を以て、己に於て、^{ひとつ あらた} 一の新なる人^{ひとつ つく}を造り、^{またじゅうじか} 又十字架にて仇を殺し、^{あだ ころ} 此を以て、

^{ひとつ み おい} 一の身に於て、^{ふたつ もの} 二の者を神と復和せしめん爲なり。且來りて、^{かみ ふくわ} 爾等遠き者及び近

^{もの わへい ふくいん} き者に和平を福音せり、^{けだしかれ よ} 蓋彼に由りて、我等二の者は、^{われらふたつ もの} 一の神に在りて、^{ひとつ しん あ} 父に近

^う づくを得るなり。故に爾等既に異民、^{ゆえ なんぢらすで} 或は他邦の人たらず、^{いみん あるい たほう ひと} 乃諸聖徒の同邦の人、^{すなわちしよせいと どうほう ひと}

^{かみ かぞく} 神の家屬なり、^{なんぢら しよしと} 爾等は諸使徒と諸預言者との基^{しよよげんしゃ もとい た}に建てられたり、^{いすす} イイスス・ハリストス

^{みづか そのすみいし} は自ら其隅石なり。此の上に全屋は組み立てられ、^{こ うえ ぜんおく く た} 次第に築きて、^{しだい きづ} 主に於ける聖殿と

^{な こ うえ なんぢら} 爲る、此の上に爾等も、^{しん よ} 神に由りて、^{かみ すまい} 神の居處として、^{とも た} 共に建てらるるなり。

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあつて、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあって共に建てられて、靈なる神のすまいとなるのである。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しじょうしゃ} 至上者よ、^{しゅ} 主を^{さんえい} 讚榮し、^{なんぢ} 爾の名に^な 歌^{うた} うは^び 美^{かな} なる哉、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ} 爾の^{あわれみ} 憐を^{あさ} 朝に^の 宣^べ、^{なんぢ} 爾の^{まこと} 眞を^よ 夜に^の 宣^ぶるは^{かな} 美^{かな} なる哉、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと} 人を^{あい} 愛する^{しゅさい} 主^わ 宰^{こころ} よ、^{かみ} 我が^し 心^{ちえ} に^{いさぎよ} 神^{ひかり} を^{かがや} 知^わ る^{しねん} 智^わ 慧^わ の^{しねん} 淨^わ き^わ 光^わ を^わ 輝^わ かし、^わ 我が^わ 思^わ 念^わ)

^め の^{ひら} 目^{なんぢ} を^{ふくいん} 啓^{おしえ} きて、^{さと} 爾^{たま} が^わ 福^{うち} 音^{なんぢ} の^{ふく} 教^{いましめ} を^{いましめ} 悟^{いましめ} ら^{いましめ} し^{いましめ} め^{いましめ} 給^{いましめ} え、^{いましめ} 我が^{いましめ} 衷^{いましめ} に^{いましめ} 爾^{いましめ} の^{いましめ} 福^{いましめ} たる^{いましめ} 誠^{いましめ} を

^{おそ} 畏^{おそれ} る^い 畏^{われら} を^{ことごと} も^{にくたい} 入^{よく} れ^ふ て、^{およ} 我^{なんぢ} 等^{よろこ} が^{ところ} 悉^{ところ} く^{ところ} の^{ところ} 肉^{ところ} 體^{ところ} の^{ところ} 欲^{ところ} を^{ところ} 踏^{ところ} み、^{ところ} 凡^{ところ} そ^{ところ} 爾^{ところ} の^{ところ} 喜^{ところ} ぶ^{ところ} 所^{ところ})

^{おも} を^か 思^{おこな} い^{ぞくしん} 且^{せいかつ} つ^す 行^{いた} い^{たま} て、^{けだし} 属^{かみ} 神^{かみ} の^{かみ} 生^{かみ} 活^{かみ} を^{かみ} 過^{かみ} ぐる^{かみ} を^{かみ} 致^{かみ} させ^{かみ} 給^{かみ} え、^{かみ} 蓋^{かみ} ハ^{かみ} リ^{かみ} ス^{かみ} ト^{かみ} ス^{かみ} 神^{かみ} よ、

^{なんぢ} 爾^わ は^{たましい} 我が^{からだ} 靈^{こうしょう} と^{われらなんぢ} 體^{なんぢ} と^{むげん} の^{ちち} 光^{しせいしぜん} 照^{しせいしぜん} なり、^{しせいしぜん} 我^{しせいしぜん} 等^{しせいしぜん} 爾^{しせいしぜん} と^{しせいしぜん} 爾^{しせいしぜん} の^{しせいしぜん} 無^{しせいしぜん} 原^{しせいしぜん} の^{しせいしぜん} 父^{しせいしぜん} と^{しせいしぜん} 至^{しせいしぜん} 聖^{しせいしぜん} 至^{しせいしぜん} 善^{しせいしぜん} に^{しせいしぜん} し

^{いのち} て^{ほどこ} 生^{なんぢ} 命^{しん} を^{こうえい} 施^{けん} す^{いま} 爾^{いつ} の^{よよ} 神^{よよ} と^{よよ} に^{よよ} 光^{よよ} 榮^{よよ} を^{よよ} 獻^{よよ} ず、^{よよ} 今^{よよ} も^{よよ} 何^{よよ} 時^{よよ} も^{よよ} 世^{よよ} 世^{よよ} に^{よよ} 、^{よよ} ア^{よよ} ミ^{よよ} ン 。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 66 端 12 章 16~21 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たとえ もう い あると ひと たはた よ みの} 謹みて聴くべし、) 主は左の譬を設けて曰えり、或富める人に田畝の善く實れるあり、

^{かれみづか はか い われなに な けだしわ さくもつ おさ ところ またい}
彼自ら忖りて曰えり、我何を爲さんか、蓋我が作物を藏むべき處なし。又曰えり、
^{われか な わくら こぼ さら おおい もの た こうち わ ことごと こくもつ}
我斯く爲さん、我が倉を毀ちて、更に大なる者を建て、此の中に我が悉くの穀物と
^{たから あつ わ たましい い たましい なんぢ たねん ため たくわ おお たから}
貨物とを聚めて、我が靈に謂わん、靈よ、爾には多年の爲に蓄えたる多くの貨物
^{やす くら の たのし しか かみ くれ い むち もの こんやなんぢ}
あり、息み、食い、飲み、樂めと。然れども神は彼に謂えり、無知なる者よ、今夜爾の
^{たましい なんぢ もと しか なんぢ そな ところ もの だれ き およ おのれ ため}
靈を爾より索めん、然らば爾が備えし所の者は誰に歸せんか。凡そ己の爲に
^{たから つ かみ おい と もの か ごと}
財を積み、神に於て富まざる者は是くの如し。

(比較用 口語訳) イエスは一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思ひめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、樂しめ』。すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ